

そして、足柄下郡荻窪村の大橋治部左衛門嘉義が、だんだん北条氏の組織の中に入って、いろいろな舞をしながら、家格を高めていくことになるわけです。

同時代には、信長・秀吉・家康も「幸若」を寵愛していました。信長の今川氏奇襲のシーンのように、「敦盛」というものが当時の戦国武将の琴線に触れるような、詩想や物語性を持っていった、ということが分かります。

『毛利家本』では、毛利輝元が、家臣を越前の幸若家に、幸若流の舞を習得してこい、と二人の家臣をわざわざ派遣しています。越前の幸若流が、毛利家の領地でも流行っている。戦国武将の毛利家も、このように舞を習得させていたということが面白いですね。

この辺から、小田原、そして桐座のほうに入っていきます。小田原桐座の「引き札」があります。引き札というのは、いまでいう宣伝パンフレットです。桐屋上と書いてあり、これが座主、興行主ということですよ。

『新編相模国風土記稿』には、「音曲舞太夫大橋四郎次井(ならびに)桐屋上」と、かなり詳しく書いてあります。『新編相模国風土記稿』



桐屋興行の引き札(荒河純さん提供)

は、小田原の歴史の話をする方々が参考にされる本ですが、間違えているところもあります。他の資料をつき合わせて調べていかないと正しい答えが出てこないかもしれません。ここには『越前国舞々幸若小八郎門弟なり』とあります。家伝によれば「其祖は筑前国大宰府の住人桑原式部嘉光と称す」。筑前国、いまの福岡県ですね。ここに先ほどの、福岡県瀬高町の大江に舞われる大頭流が繋がってきます。連綿と続いてきたものが、今でも大江に伝承される芸能として続いているということに、私は感激します。

『嘉光の第十郎光政、其の子五郎左衛門嘉高、大永三年(1523)関東に下向し始めて相州に住す』とあり、北条氏の領内に移り住みました。

『嘉高兼て幸若に所縁ありて其技を相傳す』とありますので、この人は明らかに幸若の技をもっている。『依て北條氏の舞太夫となれり』とありますのは、先ほどもお話しした通り舞をもつて北条氏に仕えた、ということです。『天文九年(1540)左京太夫氏綱、鶴岡八幡宮造営の時、社頭に法楽舞を勤む』。『代目氏綱の治世、鶴岡八幡宮の造営の際に法楽舞を舞った、という記録です。法楽舞とは、神仏に喜びを持つてもらうために舞う、奉納の舞です。この記録の中では、北条氏の「虎朱印」を貰って、かなり家格の高い扱いを受けていたということが伺えます。たびたび北条氏的重要請を受けては法楽舞などを奉納し、褒美を受けていたことが記されています。

嘉高の子、嘉政の時代に、大橋氏に改姓しています。後述しますが、由緒書を書いた大橋林当(りんどう)まで、ずっと名前が受け継がれています。小田原の松原明神でも奉納の舞を舞っているようです。嘉政の子、嘉義は、北条氏政から名前の一字をもらって「政義」と名前を改めるなど、ずいぶん高い位をもらっています。その戦国大名から名前の一字をもらうなんて、普通では考えられないことです。家格が高く、芸が特出していた、ということが伺われます。

政義は、鎌倉の玉縄城主の北条氏勝の被官となると書かれています。北条氏勝は、天正18年(1590)の小田原北条攻めの際には箱根の山中城に援軍として詰めていました。また、北条氏の武州鉢形城(現在の埼玉県寄

居町)でも舞を奉納しています。城主は北条氏邦、非常に文武に優れた人であったとされています。それから大橋家の当主が、様々な場所でも舞を舞った、ということが記されています。

小田原桐座は、女舞太夫として有名になります。『嘉明(大橋政義の子)多病なるを以て、族子銀太夫政氏を養て家業を襲しめ、娘くらを妻せ、亦家職を相傳し、女舞太夫となす』とあります。つまり養子をとって娘のくらを妻に聚らせ幸若舞を伝えていく、ここから桐座の女舞太夫が始まります。『夫婦其技を相續して、夫は音曲舞太夫、妻は音曲女舞太夫』というふうになり、夫婦で舞を伝えていく、ということになります。このあたりから江戸桐座の話も入ってきます。『正徳六年以後は、大橋四郎次桐屋上を通称として今に至る』とあります。これ以降小田原桐座については、「桐屋上」という名前がよく出てきます。この時代から通称として名乗るようになり今に至る。冷泉家から職業のことを尋ねられたときに、『日相州足柄下郡小田原領荻窪村寺町之住』、小田原桐座というのは正に寺町です。この土地に住んで、この技を伝えていく、と答えています。

『女舞太夫桐屋上、年十六歳、髪すべからじ冠も瓔珞(ようらく)、小太刀鐔木瓜、鞆黒塗、木瓜散し金蒔絵、』と、綺麗な姿が想像できます。水干を着て、単なる官能的な踊りではなく、武家の装束をしています。『小田原城主の嘉儀ある毎に』とあるので、お祝い事があるたびに音曲舞を興行していました。

小田原桐座がどのくらいの規模であったか。『宅地の後に八間半二十五間の舞台築屋棧敷等あり、興行の日は、桐屋上烏帽子水干にて舞台に出床机に踞し、相傳の謡歌を謡ふ』とあります。烏帽子水干の姿で床机に座り、相傳の歌を謡ったわけです。『傍に頒白の老叟素襖侍烏帽子にて太鼓を打是に和す』とあります。舞は水干、鼓は素襖と服装にも違いがありました。舞台で歌舞伎狂言を興行することもあり、そのときには監使が来て、必ず尾上の舞をやったあとに狂言をする、と書かれています。『歌舞伎興行の時は、檜上に紺地に桐の紋及御城附女舞太夫桐屋上と、染出せし幕を引けり』とあります。

また、『江戸浅草田原町村八太夫配下』として神事舞太夫大橋六太夫という人物の名前が見られます。これは「祖銀太夫政氏は音曲舞太夫なりしが、元禄七年家職を婿及女に譲りて別家となり」とありまして、小田原桐座とは別の系統で活動していました。

■市民会館の記憶と市民の投稿から



● 2月19日

読売日本交響楽団(指揮・大友直人)

● 3月19日

NHK交響楽団(指揮・スウィートナー)

● 4月19日

新日本フィルハーモニー交響楽団

昭和63年(1988)に小田原市民会館大ホールにて行われた、実現不可能と言われたクラシック交響楽団による3ヶ月連続コンサートです。当時の「小田原市民ホール」早期建設キャンペーンを含めて行われました。(杉崎宗雲さん)



次に、私も非常に参考にさせていただいた、石井富之助先生の論文で、小田原史談会の報告書の記載です。面白いのは、「声色は、小田原までは「通用し」という古い川柳が引用されています。小田原桐座は「出世舞台」といわれ、上方に上るときも歌舞伎をやつて、上方から江戸に下るときも興行しました。この舞台上に立つのは名優だけではなく、修行をする若手たちも小田原桐座に出ています。役者の成長を促すため、舞台を踏む、という経験になったわけです。石井先生の川柳を挙げたのも、そこなんです。「小田原までは通用し」というのは、江戸から小田原までは社会的な通念が共有のものとして通用していたんですね。寛文6年にはすでに劇場として存在していたこと、これは関東の劇場の中でも最も古い部類に入る、ということをお先生はおつ

小田原市民会館と歌舞伎



小田原市民会館と歌舞伎の繋がりを聞いた時、「え！市民会館と歌舞伎が」と思いました。

小田原市民会館は、音楽、演劇、美術、映画、写真、古典芸能、文芸といった市民の文化活動を大きく支え貢献してきています。なかでも「劇団こゆるぎ座」が小田原の文化活動に深くかかわっていたことは知っておりましたが、歌舞伎とのかわりは五十嵐写真館の湯山尊明さんの小田原桐座の話から歌舞伎とのかわりがあったことを知りました。

江戸時代には小田原には桐座という芝居小屋があったようです、このことから考えますと、市民会館は、昭和37年(1962)当時としては画期的といわれる回り舞台の装置を持った市民会館として開館し評判になった、これは明らかに歌舞伎の上演を意識した舞台装置だと思われま

さらに、市川団十郎が咳と痰の病いのためにせりふが言えず困っていた時に小田原の外郎(ういろう)を服用して病がなおりました。市川団十郎の歌舞伎十八番の一つに「外郎売」があります、歌舞伎とのつながりがうかがえます。桐座についてみてみますと、もとをたどると

しゃつています。

座主は桐屋上という女舞太夫。寛文6年(1666)に江戸木挽町で桐座の櫓を上げて興行したこと、これが関東の女歌舞伎の始といふべきものとして注目に値する、と書いています。

「劇場桐座由緒書」、大橋林当(りんとう)の著です。幕末の頃には、小田原桐座が上手くいかなかった、横浜に行くのです。その当時、横浜には外国人の居留地ができて、人がどんどん集まってきました。小田原ではなく横浜に、芸術文化を見せる場として桐座を建てます。一回目は失敗するんですね。そのような話があります。この辺は、小田原史談会の荒河純さんの論文を読んでいただけだと思います。

小田原北条氏の時代、大永3年(1523)にさかのぼります。

桐座は、舞太夫職に任じられた大橋家の家系を継ぐ女舞太夫の桐屋上が江戸時代前期に創設したといわれています、小田原の桐屋上は小田原北条氏時代から舞太夫職を務めた古流舞の大橋家から江戸時代に分家したといわれています。

一方、女舞太夫の桐大内蔵、桐長桐が江戸の舞台で興行して大当たりとなった、この一座の名が「桐座」という看板やぐらであったところからその名が全国に知れわたったようです。以来、小田原にとって由緒のある桐座は、明治の初めまで、狂言、音曲舞、歌舞伎などの興行が続けられました。

他方、歌舞伎座との関係が深かった小田原市長の鈴木十郎氏が小田原市民会館の開館記念事業に松竹大歌舞伎特別公演を企画実施したことも小田原市民会館と歌舞伎との深い絆を感じずにはいられません。

さらに平成26年(2015)には、16年ぶりに松竹大歌舞伎が小田原市民会館で上演された、この公演は中村翫雀改め四代目中村鷹治郎襲名披露「双蝶々曲輪日記玩辞楼十二曲内引窓」。

小田原市民会館は江戸時代から歌舞伎との深い関係を築いていたことを知る事ができます。(ライブリー隊員・高塩英芳)



『歌舞伎年代記』より、桐家興行の引き札

たら、もつと先まで行つていたので驚いた、と。それくらい行動圏、興行権があったんですね。それで大失敗して、持ち逃げされた、払つてくれなかったり、そういうこともあったようです。

面白いのは明治24年(1891)3月、「川上音二郎一座」が来ているんですね。「オッペケペー節」で有名な川上音二郎。彼が小田原に来てオッペケペーをやるんですが、威勢のいいお兄ちゃんたちと大喧嘩するんですね。音二郎は無罪放免で横浜に帰りますが、小田原のお兄ちゃんたちは警官からきついお灸を据えられた、というエピソードがあります。

最終的には、小田原桐座は、大正12年の関東大震災で倒れてしまっています。それ以降は、私たちの街には桐座は存在しません。それにもなつて小田原の桐屋上という女舞は、一時途絶えます。どういふものか、私も見たことがあります。見ている方は、昔日の想いがある方でしょうか、いまでは見たことがない方でご存命の方はいらつしやらないと思います。

最後に謝辞として、桐座を研究されている小田原史談会の荒河純さんにお話をいろいろ伺いました。ありがとうございました。

湯山尊明さん 参考文献

「小田原桐座について 幸若舞の話を中心に」

- ・「劇場桐座由緒書」 大橋林当
- ・『桐座記録』 中川金太郎・中川初太郎
- ・小田原桐座資料 石井富之助
- ・『小田原桐座の発見』 木村錦花
- ・「小田原桐座の開港地横浜進出について」 荒河純
- ・「筑後大江幸若舞について:系図・名称をめぐって」 松田修
- ・『おだわらの歴史』 小田原図書館編
- ・『樹陰読書』(ネットサイト) 水沢優雅

(1885) に再興のこけら落としをするんですが、そのときに桐座の大道具さんで、中川金太郎さん、二代目初太郎さんという方が『桐座記録』というものを書いていきます。この記録には、小田原桐座のこけら落としの演目、「だんまり市原野」なども書かれています。桐座、午前9時開場だそうです。朝早く行つたんですね。そんな暇人がいたのか、とちよつとびっくりします。ここに「大道具・中川金太郎」と書いてあります。確かにここにいたんですね。この時代の興行は、小田原だけでなく伊豆から駿東郡、御厨、いまの御殿場のほうですね。そちらのほうも芝居があれば呼ばれて、大道具・小道具の助っ人で行くわけです。そういう経済圏ができていたんですね。大仰に大出発をして、散々な目にあつて帰ってきた、なんて書いてあります。よく帰ってきたな、と思うのですが、だいたい3日くらいで帰れるので、お金がなくてもなんとかが帰れるんですね。それを調べた人の記事を読むと、熱海くらいだろうと思つてい

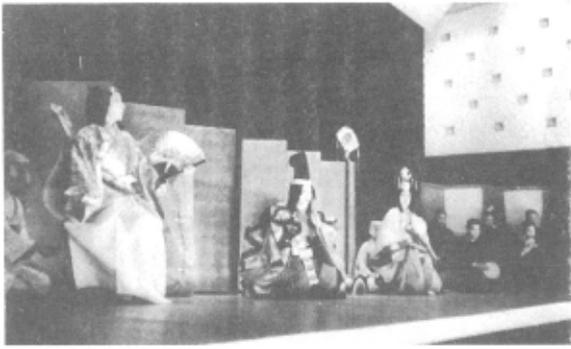
昭和の桐座復興について

様々な資料から

『特別展 小田原と歌舞伎展—元小田原市長 鈴木十郎コレクションを中心に—』パンフレットより
昭和三十一年四月、鈴木氏らは由緒ある桐家の名跡復興をはかり、かつて帝劇女優として名声のあつた森律子、村田嘉久子及び小田原の加藤澄代の三人に桐大内蔵、桐長桐、桐尾上の名称をおくつて四月一日松原神社において襲名式を行い、同十八日箱根観光会館で披露公演を開催した。

昭和三十一年四月十八日、記念公演の当日、箱根観光会館の正面には、桐大内蔵、桐長桐、桐尾上の三人のやぐらが掲げられ、両側には東京の各劇場、劇団、新聞社、放送局から贈られた花輪が飾られて市民の目を見張らせた。プログラムは、主催者、神奈川県文化財協会会長古宇田実、桐家名跡保存会会長鈴木十郎、祝辞は文学博士河竹繁敏、松竹株式会社大谷竹次郎の諸氏であった。

あいさつが終わって、木村錦花作詞、杵屋六左衛門作曲、藤間勘十郎振付の長唄「那須の与一扇の的」が披露され、続いて「北州千歳図」―梅の栄―「傀儡師」が演ぜられた。何から何まで一流の顔ぞろい、まことに華々しい記念公演であった。



桐家再興記念公演「那須与一扇の的」

(昭和31年、箱根観光会館)

『特別展 小田原と歌舞伎展—元小田原市長 鈴木十郎コレクションを中心に—』パンフレットより



桐尾上(加藤澄代) 桐長桐(村田嘉久子) 桐大内蔵(森律子)

『特別展 小田原と歌舞伎展—元小田原市長 鈴木十郎コレクションを中心に—』パンフレットより

■昭和37年1月19日市議会議事録(抜粋) 協議事項…市民会館の施設及び備品について

議員(前略)小田原での舞台芸術では、長い間の伝統があるところの桐座というものを、それをここに表わすことができたと思うが、桐座のことについてはお考えなっている。

市長その点は私も非常に広く要望されていることであるから、市民会館というか、公会堂というか、市民会館でいく方がいい思っているが、小田原の市民会館というものを古いものをやる場合に別名桐座ということで、歌舞伎をやるときは桐座なんだということで、桐座の名前を復興したらどうかという考えを持っている。それで皆さんの考えておられることが、ある程度実現するのではないかと思っている。

議員ついでにそのときに、桐座の連中がいるのだが、それについても考えたらどうかと思

■昭和41年・松竹大歌舞伎小田原公演 パンフレット「桐座座名復興について」より

(昭和41年6月9日・10日公演)

此度、尾上梅幸丈、市村羽左衛門丈を主軸とする松竹大歌舞伎を小田原市民会館に迎え、九日・十日の両日公演することができましたことはまことに喜ばしいことであります。

今回の公演を桐座座名復興記念公演と銘打ちましたについて申しあげたいと思ひます。そもそも桐座という座名は、小田原には極めて由緒ある櫓でありまして、遠く江戸時代の初期から小田原の寺町にあつて、当初から多くの名優を迎え特別な格式をもつ劇場として知られておりました。

この桐座のもとを尋ねて参りますと、北条氏の時代、大永三年(一五二三)小田原に移住し、舞太夫職に任ぜられた大橋家を祖とし、以来桐家と称し代々舞太夫をつとめてきた伝統のある家柄でありました。

その桐家が江戸時代の初期に桐座を作ったのでありました。関東十八座の一つとして挙げられ、江戸歌舞伎との関連においては、市村座の控え櫓となつたこともあるというような、江戸歌舞伎史上にもいろいろつながりの深いものがあつたのであります。

先年、その桐家の名跡を復興するため、近代女優の第一人者といわれた森律子さんらに桐大内蔵その他桐家に由緒ある名跡を継承して貰つたのであります。ところで劇場としての桐座は、大正の頃まで辛じて存続しておりましたがその後廃座となつてしまつておりますので、小田原にとり由緒あるこの座名を永く保存し、後世に伝える意味に於いて、今回の松竹大歌舞伎の公演を機として座名を再

興したものであります。今後、古典芸術等を上演する場合は、桐座の座名を以て公演いたしたいと考えた次第であります。



桐尾上着用の冠台座

『特別展 小田原と歌舞伎展—元小田原市長 鈴木十郎コレクションを中心に—』パンフレットより

尾上梅幸芸術院賞受賞
祝座名跡再興記念興行・尾上梅幸創立
松竹大歌舞伎公演
6.9.10 於・小田原市民会館

前夜	19時30分	1,500円
当日	19時30分	1,000円
	18時30分	800円
	17時30分	500円

歌舞伎展覧会

おだわらライブラリー通信 第五号

- 発行 小田原市 文化部文化政策課
- 平成27年度文化創造活動担い手育成事業「文化資源発掘ワークショップ」報告書
- 編集 富士原 直也(文化政策課)
- 資料提供
荒河純さん(小田原史談会)
北村敏弘さん
杉崎宗雲さん
- 印刷 平成28年3月吉日
- 問合せ 0465-33-1709
〒250-8555 小田原市荻窪300番地
文化政策課 芸術文化創造係
電話 0465-33-1706 / FAX 0465-33-1526